

〔国語〕

○ 実施時間 【8:30~9:20】(50分)

○ 次の注意をよく読んでおくこと。

- (1) 「始め」の合図があるまで問題用紙を開かないこと。
- (2) 問題は **一** ~ **三**、20ページまであります。
- (3) 答えはすべて解答用紙の解答欄にはっきりと、ていねいに書きなさい。
- (4) 答えを直すときは、きれいに消してから書きなさい。
- (5) 内容に関する質問は受け付けません。
- (6) 気分が悪くなったり、トイレに行きたくなったりしたら、手をあげて監督の先生に合図しなさい。かんとく
- (7) 「終わり」の合図があったら、直ちに筆記用具を置き、解答用紙が回収されるまで待っていなさい。
- (8) 解答上の注意
 - ・字数指定のあるものは、句読点〔。、〕および「」や〔〕なども一字と数えること。なお、一マスには一字しか入れられません。
 - ・文末表現は、「こと」、「から」など、問い合わせにふさわしい形にし、文の終わりには句点〔。〕をつけなさい。

受験番号		氏名	
------	--	----	--

一

次の――のカタカナを漢字に改めなさい。

① 昆虫のヒョウホンを作る。

② 展覧会のモクロクを見た。

③ 雨天ジ^ンエンの予定だ。

④ 世界選手権でシユクテキを破つた。

⑤ コーヒーにサトウを入れる。

二については、著作権の関係から掲載を省略いたします。

① 思い出すことのできる最も古い記憶の自分は泣いている。所々、涙がれ落ちた実家の土壁を背にしていたのは、それより奥に逃げる場所がなかつたからだ。髪を生やした男が、少し困つたような顔で僕の泣き顔を覗き込んでいる。僕は髪の男とのように接していいのか分からず、泣くことしかできない。だが、その髪の男が自分の父であることを本当は分かつていて。

台所から、「久しぶりだから、お父さんの顔忘れてるんじゃない?」と母の声がする。その言葉を聞いて、父が笑いながら「なんや、忘れたんか?」と話し掛けてくる。

やはりその人は父だった。声にも聞き覚えがある。だから泣く必要はないのだが、「一応、泣いとこか」という感覺に近かつた。父が帰つて来た嬉しさもあるが、落ち着かない気持ちを表明したくて泣いていたのだ。僕は二歳になつたばかりだった。それより前の記憶はないので、僕の人生はその風景から始まる。

父は沖縄県名護市の出身だった。高校を卒業してすぐに、競輪選手になるという夢を叶えるために大阪にやつて來た。父に競輪選手になれたのか聞くと、「そもそもプロテストを受ける会場に辿り着けなかつた」という答えが返つてきた。競輪選手になるためには自転車を乗りこなす前に、まず大阪の電車を乗りこなす必要があつたのだ。

まだ結婚前の両親が自転車屋の前を通り掛かると、父が「あの自転車に乗りたい」と言うので、お店の人には声を掛け試乗させてもらつたそうだ。母は店員と話しながら父が自転車で走り去つた方向を眺めて待つたが、いつまで経つても父は帰つて来なかつた。結局、気まずくなつた母がその自転車を購入することになつた。自転車を漕ぐのが気持ち良くて、帰つて来られなくなつたのだろう。父が真剣に競輪選手を目指していたかどうかは疑わしいが、自転車を好きだつたのは本当だつたようだ。

僕が十八歳まで過ごした実家は、大阪で「文化住宅」と呼ばれる長屋のような建物だつた。壁がとても薄く、お隣さんの「えはんできたよ」という声に思わず返事をしたこともあつた。日曜日にお隣さんがレコードを流し始めると、又吉家はテレビを

消して、隣から聴こえるレコードに耳を傾けた。

ある日、近所の人が、「おたくの息子さんウチの家の壁におしつこしていませんか?」と、苦情を伝えに來たことがあつた。全く身に覚えがないと母に伝えると、母は「うちの子ではないみたいですね」と言いに行つてくれた。その辺をうろついている野良犬かなにかの仕業なのだろうと、いうことで話は落ち着いた。

その夜、仕事から帰宅した父に一連の出来事を話すと、父は「それ、俺やで」とつぶやいた。「外で小便したら気持ち良いねん」とも言つた。犯人は野良犬ではなく、その辺をうろついていた父だった。

僕が六歳の頃、祖母が住む沖縄に父と帰省したことがあつた。祖母の家に新年を祝う親戚や近所の人人が大勢集まり、宴会が開かれだつた。誰かが即興で三線を弾いて唄い始めると、酒に酔つた父が立ち上がり、その曲に合わせて踊り出した。陽気に踊る父を見て、宴会の参加者達は盛り上がつた。

みんなを笑わせる父を、「かっこいいな」と感動しながら眺めていた。一方、部屋の端っこで隠れるようにして、いる自分を情けなく思つていた。すると、親戚の一人が、「直樹も踊れ!」と僕を煽るように叫んだ。僕は人前でなにかをすることが苦手な少年だつた。しかし、父が折角盛り上げているのに、この場を息子が白けさせてしまつていいのだろうか、思い切つて踊るべきではないだろうかと悩んだ。

僕は覚悟を決めて立ち上がり、父の真似をして力チャーシーを踊つた。次の瞬間、僕は爆発するような笑い声に包まれていた。父よりも遥かに大きな笑いを起こしたのである。不器用な少年が下手に身体を動かしていることが滑稽に見えたのだろう。それでも、初めて自分の行動によつて、大勢の大人を笑わせられたことに強い興奮を覚えた。胸の鼓動がとても早く打つのが分かつた。落ち着くために、誰もいない台所に移動して一人で麦茶を飲んでいた。父が僕の側にやつて來た。「よくやつた!」と、褒めてくれるのかと期待していると、父は、「あんまり調子に乗んなよ」と言つた。父は自分の子供に全力で嫉妬していたのだ。あまりの言葉に驚いたが、父らしい態度だと思つた。

自分の行動によって笑いが起る「ことがこんなにも痛快である」と、調子に乗ると誰かに怒られる「こと」の一つを一度で学んだ。調子に乗らず笑いを起こしたいという矛盾^③を孕んだ僕の芸風は、この瞬間に生まれたのだと思う。

（中略）

僕が高校を卒業して上京してからは、極端^{きょくたん}に父と会う機会が減った。しばらく距離^{きり}が開くと、父の個性がさらに分かることになった。ある時、実家に帰ると父が夜中なのに作業着だったので、今帰つて来たのかと聞くと、「明日、早いからもう作業着で寝るんや」と意外な答えが返ってきた。父は配管工としていろんな現場で働いていた。また別の日には、夜遅^{おそ}くまで仕事仲間と部屋で酒盛りをしていることがあった。理由を聞くと、「明日、同じ現場やから泊まらせるんや」と言う。「あの人達、明日一緒に現場に行くつて言つてるけど休むと思うよ」という母の予言通り、父と仕事仲間は仕事を休むことになった。

ある時、しばらく仕事を休んでいる言い訳のよう、「不景氣で現場がないねん。あれば働きたいんやけどな」と深刻な表情で父が僕に言った。その後に現場の親方から仕事の誘いの電話があり、父は僕の目の前でその電話を取つた。父は妙^{みょう}に手先が器用なので、仕事の依頼^{いらい}は多かった。父の仕事が決まって良かつたと安心していると、父は怪訝^{けげん}な表情を浮かべて、「えつ、明日ですか？急過ぎるので明日はちょっと……」と先程の話を引つ繰り返すように仕事の誘いを断つた。さつきの深刻な表情はなんだつたのだろうと不思議に思ったが、^④その意外性^こそが父だった。

父が東京で芸人の活動を続ける僕のことを、どのように思つていたのかは分からぬ。収入が少なく実家に仕送りするような余裕^{よゆう}がなかつたので、後ろめたさをずっと感じていた。そんなある時、父が僕について次のように話したことがあつたそうだ。

「今、現場に直樹と同じ年齢^{ねんりよう}の若い奴^{やつ}がおんねん。朝から晩まで汗搔^{あせか}いて、一生懸命^{いっしょめい}働いてるわ。あれ、アホや。それに比べて直樹は自分の好きなことをちゃんとやつて偉いわ」

「アホはあんたや」と叫びたくなる。社会の常識から大きく外れた考え方だ。普通^{ふつう}は汗を搔いて過酷^{かく}な労働^{ろうどう}をしている人こそ評価^{ひやく}され

るべきだが、その言葉だけではなく、父の生活を振り返つてみると、A という考えが根底にあつたのかも知れない。

十年ほど前に父は一人で大阪から地元の沖縄に引っ越した。父は大阪にいる時はちょっと浮いていて、危険な感じがしていたが、沖縄で見る父はB を得たC のように自由で、人生^{生⁴おう}を謳歌^{おうか}しているように見えた。

僕が書いた『火花』という小説が芥川賞^{あくたがわ}を受賞した時、父が暮らす沖縄県名護市の集落で祝賀会を開いてくれた。集落のみなさんを中心に、多くの人が集まつてくださつた。祝賀会のなかで集落の会長が、「ここではね、苦しい時も、嬉しい時も、ずっとみんなで大切に唄い続けてきた歌があるんです」と情熱を込めて話してくれた。

「直樹さんは聞いたことがないかも知れませんが、この集落で生まれ育つた直樹さんのお父さんは、子供の頃からこの歌を聴いてきましたよね？」と会長が父に話を振つた。

その場にいた全員が父を見た。すると父は淡淡^{たんたん}と、「いえ、一度も聴いたことがありません」と答えた。^⑥ その場にいた全員が笑つた。僕もなにかふざけたことを言いたくなつたが、「あんまり、調子に乗んなよ」と父に言われるのが怖くてなにも言えなかつた。

集合場所に父が青い車に乗つて現れただけで、みんなが「青い車だ」と言つて笑う。全員で記念写真を撮影^{さつえい}しようとした瞬間に、カメラの背後からビールを持って歩いて来る父を見てみんなが笑う。父が動き、言葉を発すると誰かが笑つた。呼吸するだけで笑いが起こせることが羨ましい。芸人になって間もない頃、僕が舞台^{ぶたい}に登場すると一言も発していなかつて笑いが起つた。^⑤ 雰囲^{ふんい}気だけだと揶揄^{ほのめ}される」ともあつたが、父から譲り受けた武器のおかげで生き抜けたのかも知れない。

大人になつてから、「親の話が多い」と指摘^{しつてき}されたことが多々あるが、自分でも両親に対する興味が異常に強いと自覚している。創作に於ける人型は、父と母の二つしか持つていないと言つても過言ではない。最初に知つた人間が両親だったので、両親との差異で他者を把握^{はあく}する癖^{くせ}が付いている。

父からはろくに褒められたこともないし、理不尽^{りふん}な屁理屈^{へりく}を押し付けられることが多かつた。それでも会いたいと思うのは面白い人だからなのだろう。仕事で沖縄を訪れた際には、父に連絡^{れんらく}するのだが、「那覇^{なは}で遊んどけ」と言つて、なかなか会おうとしない。

いつでも父は仲間と酒を飲んでいるか、鳥と遊んでばかりいるのだ。

(又吉直樹『月と散文』KADOKAWAより)

注1 長屋……長い一棟の建物をいくつにも区切り、一区切りが「戸」とした住宅。

注2 三線……弦楽器の一種。

注3 カチャーシー……沖縄民謡の演奏に合わせて踊られる踊り。

注4 謡歌……恵まれた幸せを大いに楽しむこと。

注5 挪揄……からかう」と。

問1 ——①とありますが、この時の「自分」が泣いている理由を七十字以内で答えなさい。

問2 本文中の で囲われている部分について、A～Eの生徒たちが意見を述べています。 で囲われている部分の内容に関する生徒の意見としてあてはまるものを次の中からずつ選び、ア～オの記号で答えなさい。

ア 生徒A お隣さんとの壁がとても薄い「文化住宅」でのかつての生活は、「僕」にとつて不満のある生活であり、その頃の生活には二度と戻りたくないという「僕」の本心が具体的に表現されているね。

イ 生徒B 父の行動に振り回されてばかりいる「僕」の母はかわいそうだね。ところに、母の父に対する怒りが示されているよ。

ウ 生徒C 父がまだ購入していない自転車に乗つたまま帰つて来なかつたという話からは、父は自分のやりたいことに対してもうとん突つ走つてしまう人物だということが伝わってくるね。

エ 生徒D 競輪選手のプロテストに受かる自信がなくて、あえてテスト会場に行かなかつたという父のエピソードからは、いつも強気な父も時には弱気になる」ともあるという人間らしさがにじみ出ているね。

オ 生徒E 近所の家の壁に小便をかけていたのは野良犬などではなく、実は父であつたなど、お笑いで言う「オチ」のような表現が用いられているよ。

問3 ——②とありますが、この時の父の気持ちを三十五字以内で答えなさい。

問4 ——③「矛盾」の意味として最もふさわしいものを次のの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 他を圧倒するくらいすぐれたこと。
イ 理屈として二つの事柄のつじつまが合わないこと。

- ウ 腹がよじれるくらい面白いこと。
エ 余計なつけたしや、無用のこと。

- オ 完全で、欠けている点がまったくないこと。

問5

——④とあります。どのような点が意外なのでしょうか。説明として最もふさわしいものを次のなかから選び、記号で答えなさい。

- ア 基本的には人と関わるのが苦手なはずなのに、仕事仲間を家に泊まらせるなど、人に対して面倒見の良い一面がある点。
イ 父はしばしば仕事を休み、いちいち言い訳をするほど仕事に対して消極的なのに、父への仕事の依頼は途絶えることがない点。
ウ 東京で芸人をやるようになつた「僕」と会う機会が極端に減つてしまつても、以前と変わらない様子で接してくれる点。
エ 深刻な様子で仕事がないことを嘆いていたにもかかわらず、せつかく来た仕事の依頼を断つてしまうような点。

- オ 実家に仕送りをする余裕がない「僕」に、後ろめたさを感じさせないような点。

問6

□Aに入る言葉として最もふさわしいものを次のなかから選び、記号で答えなさい。

- ア 人間は好きなことをやるべきだ
イ 懸命に労働することは評価されるべきだ
ウ 若者は苦労をするべきではない
エ 常識を外れることが大切なのだ
オ 好きなことをやるだけでは食べていけない

問7

——⑤が「その人に合つた場で生き生きと活躍するさま」という意味になるように、

□B・Cに入る漢字一字をそれぞれ

問8 ——⑥とあります。なぜ、その場にいた全員が笑つたのはなぜだと考えられますか。その理由として最もふさわしいものを次

- の中から選び、記号で答えなさい。
- ア 普段はどこか浮いていて危険な感じのする父が、いつになくしょらしい態度で歌を聴いたことがないと言つた様子が、とても面白かったから。

- イ 集落の人々がたくさん集まつていてる場にもかかわらず、面白いことの一つも言わないで、眞面目な態度をとつていた父の様子がおかしかつたから。
- ウ 集落の中で大切に唄い続けてきた歌を、集落で生まれ育つた上に、誰よりも大切にしてきたはずの父が忘れてしまつていていたことが意外で面白かったから。

- エ 生まれてから一度も聴いたことのない歌を、聴いたことがないと父があまりに正直に答えてしまつたことが、滑稽に思えたから。
- オ 集落で生まれ育つた父なら知つてはいるはずの歌を、父が一度も聴いたことがないと淡々と言つてのけたことが面白かったから。

本文に関する説明としてあてはまるものには○を、あてはまらないものには×をつけなさい。

ア 「僕」と父の感情的な会話文が多用されることによって、「僕」と父の関係が時間の経過とともに緊張感のあるものに変わつていく様子が描かれている。

イ 主に「僕」の視点から父に関する個性的な出来事が多く描かれていることからは、父に対する「僕」の強い関心を読み取ることができる。

ウ 「僕」が父の心情を推測する場面がたびたび出てくるものの、実際の父の心情は全然違うものであつたことが、文章を読み進めるにつれて明らかになっている。

エ 父の視点から過去の出来事を振り返る回想場面がたびたび用いられることで、読者が父の心情に共感し易くなるような工夫がなされている。

オ 動いたり言葉を発したりするだけで笑いを起こせる父のことを「僕」が羨ましく思っている様子などからは、「僕」の父に対する好意的な評価がうかがえる。

このページに設問はありません